

# グリフィスによる官話訳《新約全書》の版本間における 異同箇所について

永井 崇弘<sup>\*1</sup>

## はじめに

プロテスタントのキリスト教の世界では、1857年にメドハーストとストロナックによる南京官話訳《新約全書》が官話訳新約聖書として初めて出版された。その後、この官話訳聖書は1869年に修訂が行われ、1874年、1878年、1879年、1880年、1882年、1884年と版が重ねられた<sup>1)</sup>。1867年に英国人外交官のトマス・ウェード(Thomas Francis Wade, 1818-1895)により《語言自邇集》が出版され、官話の中心が南京官話から北京官話に移行していくのと同じように、1872年になって北京委員会により北京官話訳が出版されると、南京官話訳本は徐々に官話訳の代表的地位を北京官話訳本に譲ることとなった。この北京委員会による北京官話訳本は版を重ね、1919年の官話合訳が出版されるまで、官話訳聖書の代表の地位を守り続けた。このような官話の移行期における南京官話と北京官話の言語的特徴を西洋人資料から解明するにあたり、グリフィスの南方官話訳と称される官話訳聖書の漢訳文の位置づけを行うことは重要である。漢訳聖書を中国語資料として取り扱う際に留意する必要があるのは、その系譜と版本間の異同である。本稿では、グリフィスによる初版系の1892年版(引照なし)と最終訳系の1906年版(引照付)の官話訳新約聖書における異同箇所を抽出し、その特徴や影響関係の考察を行うことにより、南京官話と北京官話の境界線を探る重要な手掛かりとなるグリフィスによる官話訳の漢訳文の解明につなげたい。

## 1. 漢訳者グリフィス

グリフィス(Griffith John, 1831-1912)は、英国ウェールズのスウォンジー(Swansea)出身のロンドン伝道会(London Missionary Society)宣教師である。中国名は楊格非。グリフィスは1850年9月から1854年1月までは、ブレコン・カレッジ(Brecon College)で学びながら、1853年3月からはロンドン伝道会でも奉仕を行うようになった。彼は当初、マダガスカルへの宣教を希望していたがかなわず、中国に向かうこととなる。1854年4月6日のイースターにエベニーザ教会(Ebenezer Chapel)で接手礼を受け、4月13日にはマーガレット・グリフィス(Margaret Jane Griffiths)と結婚する。翌年の1855年5月21日にグリフィス夫妻はロンドンから船で英国を

---

<sup>\*1</sup>福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

発ち、9月24日に上海に到着した。中国では1860年まで上海を拠点としつつ、その周辺地域でも活動していたが、第二次アヘン戦争によって1858年に締結された天津条約に基づき1861年3月に漢口が実質的に開港されると、そのおおよそ3か月後には漢口に活動の拠点を移した。その後グリフィスは50年にわたり漢口を中心に活動した。1912年1月になってグリフィスは英国に帰国するが、同年7月25日にロンドンで80歳の生涯を閉じることとなる。彼は宣教師として直接伝道で豊かに用いられ、1905年には教会員数が8000人にもなった。また、グリフィスは間接伝道者としても豊かに用いられ、漢訳聖書の翻訳者としてもその名を馳せた<sup>2)</sup>。

## 2. グリフィスの漢訳聖書について

Spillett 1975によると、グリフィスによる文言系の漢訳聖書は、浅文理 (Easy Wenli) 訳と官話 (Mandarin) 訳のみで、文理 (Wenli) 訳は見られない。グリフィスは直接伝道に際して、トラクトの配布が最も有効な方法だと考えていた。彼はトラクトに聖句を引用するにあたり、文理訳はあまりにも難解であり、また官話訳は通用地域が限定されていて、どちらも使い難いと感じていた。そこで、グリフィスは聖書を平易な文理で漢訳することとし、1883年に浅文理訳の翻訳に着手し、同年にマルコの福音書とヨハネの福音書の漢訳を完成させると、1885年には最初の浅文理訳《新約全書》を出版した。さらに1889年にはその改訂版が出版され、1899年に至るまで版を重ねられた。

グリフィスは文言系の浅文理訳のほかに、官話訳聖書の翻訳も行っている。官話訳については、当時すでに1872年に完成した北京委員会北京官話訳本が優れた訳本として流通していたが、北方の色彩が強いものとして認識されていた。そこで、英国外国聖書協会 (British and Foreign Bible Society) とスコットランド聖書協会 (National Bible Society of Scotland) は、グリフィスに新たな口語訳聖書の翻訳を依頼し、それが官話を使用する地域における公認漢訳文となることを期待した。このグリフィスによる官話訳は、彼の浅文理訳から重訳したもので、初版の《新約全書》が1889年にスコットランド聖書協会より出版された。Spillett 1975によると、この初版系の新約聖書は1891年にも同じ丁数で同協会から出版され、1893年には引照付の版本が同協会より出版されている。さらに、引照の有無は不明であるが、1896年と1899年、1901年、1903年の出版の記載が見られる。本論では初版系の引証なしの版本として1892年版を使用し、最終訳系の引照付の版本として1906年版を使用して、2種の版本における漢訳本文の異同について考察を行うが、Spillett 1975にはこの両者の記載は見られない。

## 3. グリフィスによる官話訳《新約全書》における節の合併と異同箇所について

1892年版と1906年版の官話訳新約聖書の漢訳本文を比較すると、節の合併箇所と読点、語彙、さらに文法としては虚詞に異同箇所が見られる。

### 3.1. グリフィス訳《新約全書》における節の合併

グリフィスの漢訳新約聖書には節区分に特徴があり、多くの節の合併が見られる。合併の状況は表1のとおりであるが、参考として1857年版のメドハースト・ストロナックによる南京官話訳《新約全書》と1872年版の北京委員会による北京官話訳《新約全書》、1870年版の英語欽定訳(KJV)についても併せて示す。なお、「官話」はグリフィスの官話訳、「浅」はグリフィスの浅文理訳、「麦」は1857年版のメドハースト・ストロナックの南京官話訳、「北」は1872年版の北京委員会の北京官話訳をそれぞれ示す。

表1

合併箇所	1889 官話	1892 官話	1906 官話	1885 浅	1886 浅	1889 浅	1890 浅	1898 浅	1857 麦	1872 北	1870 KJV
ルカ 17:26-27	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
ヨハ 10:14-15	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
ロマ 15:18-19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
Ⅱコリ 3:7-8	×	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×
Ⅱコリ 10:15-16	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
エペ 5:8-10	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
エペ 6:2-3	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
コロ 1:3-4	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
コロ 2:20-21	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
コロ 3:9-10	×	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
Ⅰテサ 5:16-18	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
Ⅰテサ 5:21-22	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
Ⅱテサ 2:9-10	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
Ⅱテサ 2:16-17	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
テト 3:4-5	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
ヘブ 6:4-5	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
ヘブ 10:19-20	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×
ユダ 24-25	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×

表1から、1892年版と1906年版の官話訳における節の合併箇所は同じで、ルカ 17:26-27、ヨハ 10:14-15、ロマ 15:18-19、Ⅱコリ 3:7-8、Ⅱコリ 10:15-16、エペ 5:8-10、エペ 6:2-3、コロ 1:3-4、コロ 2:20-21、コロ 3:9-10、Ⅰテサ 5:16-18、Ⅰテサ 5:21-22、Ⅱテサ 2:9-10、Ⅱテサ 2:16-17、テト 3:4-5、ヘブ 6:4-5、ヘブ 10:19-20、ユダ 24-25の18箇所へのぼることが分かる。これは1857年版のメドハースト・ストロナックによる南京官話訳《新約全書》の1箇所（ロマ 15:18-19）、1872年版の北京委員会による北京官話訳《新約全書》の6箇所（ロマ 15:18-19、コロ 1:3-4、コロ 2:20-21、テト 3:4-5、ヘブ 10:19-20、ユダ 24-25）と比べてもかなり多い。これら18箇所の合併箇所を官話和合訳の標点

符号と比較すると、官話和合訳では「。」(凡一氣或數氣而意思已全的)が使用され、意味上で区切ることが可能なのは、ルカ17:26-27、ヨハ10:14-15、Iテサ5:21-22の3箇所しかない。残りのロマ15:18-19、IIコリ3:7-8、エペ5:8-10(2箇所)、コロ1:3-4、Iテサ5:16-18(2箇所)の7箇所では「。」(凡一氣而意思不全的)が使用され、IIコリ10:15-16、コロ3:9-10、IIテサ2:9-10、IIテサ2:16-17、テト3:4-5、ヘブ6:4-5、ヘブ10:19-20、ユダ24-25の8箇所では「、」(凡一氣而意思不全的)が用いられ、さらにエペ6:2-3とコロ2:20-21の2箇所では官話和合訳でも節を合併して訳出している。つまり、グリフィスによる1892年版と1906年版の官話訳の合併箇所18箇所のうち、意味上で区切ることが可能で節の合併が必ずしも必要でないのは3箇所のみで、残りの15箇所は意味上で区切ることができない箇所であり、グリフィスがこれらの節を合併させたことには、おおよそ合理性があると言える<sup>3)</sup>。また表1から、グリフィス訳における節の合併箇所は、1889年までの1889年版官話訳、1885年版と1886年版、1889年版の浅文理訳では一致せず安定していないが、1890年以降の1892年版と1906年版の官話訳、1890年版と1898年版の浅文理訳のすべてで、1886年版の浅文理訳の節区分での一致がみられ、節の合併箇所が安定していることが分かる。

### 3.2. 官話訳の1892年版と1906年版の訳文の異同

官話訳の1892年版と1906年版の漢訳本文の異同箇所は、読点の位置と漢字の字体の異同がほとんどを占める。読点の異同は印刷のかすれもあり完全に把握することは困難であるが、67箇所の異同を確認している。このうち黙示13:16のように、1892年版の古いバージョンの読点の位置が新しい1906年版より正確である場合も見られる。

1892：他又使衆人、或大或小、或貧或富、或自主的、或爲奴的、都在右手、或在額上受印記、  
(黙示13:16)

1906：他又使衆人或大或小、或貧或富、或自主的、或爲奴的、都在右手、或在額上受印記、

さらに、1892年版と1906年版の間には漢字の字体の異同も見られる。漢字の字体は、「叫」(1892年版)と「叫」(1906年版)、「温」(1892年版)と「温」(1906年版)、「回」と「回」に異同が確認できる。「回」と「回」については、どちらの版本とも統一して一方のみを使用しているのではなく、それぞれの版本のなかで混在して使用されているが、「回」(1892年版)から「回」(1906年版)への異同は11箇所、「回」(1892年版)から「回」への異同は141箇所とかなりの偏りが見られる。訳語や訳文に関する異同は、ルカ24:53、ヨハ5:32、使徒9:17(2箇所)、使徒16:12、使徒18:7、使徒18:8(2箇所)、使徒19:29、黙示4:3の8節10箇所しかない。

#### 3.2.1. 本文・注釈の異同

この異同はルカ24:53の1節1箇所を確認できる。以下の文のうち、「1892」、「1906」、「1889」は

グリフィスの官話訳、「浅」はグリフィスの浅文理訳、「麦」は1857年のメドハースト・ストロナックの南京官話訳、「北」は1872年の北京委員会による北京官話訳、「KJV」は英語欽定訳（King James Version）、「TR」はギリシア語公認本文（Textus Receptus）をそれぞれ示す。

1892：常在殿裏、讚美稱頌上帝、亞門（ルカ 24:53）

1906：常在殿裏、讚美稱頌上帝、亞門

1889：常在殿裏、讚美稱頌上帝、亞門

浅1886：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1885：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1889：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1890：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1898：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

麦1857：常在殿裡稱讚上帝

北1872：常在殿裏讚美稱頌神。

KJV: And were continually in the temple, praising and blessing God. Amen.

TR: καὶ ἦσαν δια παντός ἐν τῷ ἱερῷ, αἰνοῦντες καὶ εὐλογοῦντες τὸν Θεόν. Ἀμήν.

ここでは、1892年版では本文に入っていた「亞門」が、1906年版では小字の注釈に変更されている。浅文理訳では、1885年版、1886年版、1889年版、1890年版、1898年版のすべてが1892版と同様に、「亞門」を本文に入れている。ギリシア語公認本文とそれを底本とした英語欽定訳でも、アーメン（「Ἀμήν」、「Amen」）がそれぞれ本文に見られる。しかし、1857年版のメドハースト・ストロナックの南京官話訳と1872年版の北京委員会による北京官話訳では、この「亞門」は訳出されていない<sup>4)</sup>。また、ウェストコット・ホートのギリシア語本文でも「Ἀμήν」は削除されており、ほぼ同時期に出版された1908年の官話和合訳でも訳出されていないことから、グリフィスは1906年版で小字の注釈に変更したものと考えられる。

### 3.2.2. 固有名詞の異同

この異同箇所は使徒16:12、使徒18:8、使徒19:29の3節4箇所を確認できる。

(1) 1892：從那裏到腓立比、腓立比是馬其頓東路的第一城也是羅馬的駐防城、在這城裏住了數日、  
（使徒16:12）

1906：從那裏到腓力比、腓力比是馬其頓東路的第一城、也是羅馬的駐防城、在這城裏住了數日、

1889：從那裏到腓立比、腓立比是馬其頓東路的第一城也是羅馬的駐防城、在這城裏住了數日、

浅 1885：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬之駐防城也、在此城居數日、  
 浅 1886：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬之駐防城也、在此城居數日、  
 浅 1889：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬駐防城也、在此城居數日、  
 浅 1890：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬駐防城也、在此城居數日、  
 浅 1898：由彼至腓力比、腓力比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬駐防城也、在此城居數日、  
 麦 1857：又到腓立比、就是馬其頓一角的大城、又是新造的城、在那裡住了幾天、  
 北 1872：從那裏來到腓立比、腓立比是馬其頓東路的第一城、也是羅馬的駐防城、在這城裏住了幾日。

- (2) 1892：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、  
 (使徒 18:8)

1906：那管會堂的人基士部、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、  
 1889：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、  
 浅 1885：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、  
 浅 1886：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、  
 浅 1889：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、  
 浅 1890：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、  
 浅 1898：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、  
 麦 1857：管會堂的人革哩士布闔家信主、哥林多的人聽道理、信耶穌受洗禮的很多、  
 北 1872：管會堂的人革里士布和他的全家、都信了主、還有許多哥林多人聽了道理、信從受洗。

- (3) 1892：全城的人都攪亂起來、捉住保羅同行的馬其頓人該由、和亞哩達古、齊心擁進戲園、(使徒 19:29)

1906：全城的人都攪亂起來、捉住保羅同行的馬其頓人迦猶、和亞哩達古、齊心擁進戲園、  
 1889：全城的人都攪亂起來、捉住保羅同行的馬其頓人該由、和亞哩達古、齊心擁進戲園、  
 浅 1885：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、  
 浅 1886：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、  
 浅 1889：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、  
 浅 1890：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、  
 浅 1898：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、  
 麦 1857：闔城的人擾亂起來、把保羅同走的馬其頓人迦猶和亞哩達古捉住、一心擁擠上來、走進看戲的地方。  
 北 1872：合城的人都擾亂起來、拉著與保羅同行的馬其頓人該猶、和亞哩達古、齊心擁到戲園裏去。

(1) は地名の異同で、ピリピの漢訳が「腓立比」から「腓力比」に改訳されている。官話訳1892年版は1889年版の官話訳と浅文理訳の1885年版、1886年版、1889年版、1890年版と同じく「腓立比」と訳出しているが、官話訳1906年版では浅文理訳の1898年版と同じく「腓力比」と訳出している。このことから、1892年版の官話訳は1889年版の官話訳または出版年が近い1890年版の浅文理訳に基づき、1906年版の官話訳は1898年版の浅文理訳に基づいていると考えられる。ここのピリピは新約聖書の11番目の文書であるピリピ書の「ピリピ」のことであるから、1885年版、1886年版、1889年版、1890年版の浅文理訳および1889年版と1892年版の官話訳のこの箇所の訳語は、本来「腓立比」ではなく、「腓力比」と訳出しなければならないものである<sup>5)</sup>。この使徒16:12の「ピリピ」は1898年の浅文理訳では修正が施され、1906年版の官話訳でもピリピ書の表記と一致した「腓力比」に修正されている。

(2) と (3) は人名表記の異同である。(2) は1892年版ではクリスポの訳語に「革哩士布」を充て、1906年版は「基士部」を充てている。「革哩士布」はすべての浅文理訳およびメドハースト・ストロナックの南京官話訳と一致し、北京委員会の北京官話訳では「革里士布」と類似の表記となっている。また(3)は「ガイオ」の訳語であるが、浅文理訳ではすべて「該由」と訳出され、1892年版の官話訳と一致している。これらのことから、1892年版の官話訳が1889年版の官話訳を継承しているか、出版年が近い1890年版の浅文理訳に基づいていると言える。1906年版の官話訳の「迦猶」はどのグリフィス訳とも一致せず、1857年のメドハースト・ストロナックの南京官話訳との一致が見られるが、その理由は不明である。

### 3.2.3. 指示詞の異同

指示詞の異同は使徒18:7と使徒18:8の2節2箇所に見られる。

(1) 1892：保羅就離開會堂、有一個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進了他的屋、那屋靠近會堂、  
(使徒18:7)

1906：保羅就離開會堂、有一個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進了他的屋、這屋靠近會堂、

1889：保羅就離開會堂、有一個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進了他的屋、那屋靠近會堂、

浅1885：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1886：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1889：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1890：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1898：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

麦1857：就離了他們、有個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進他的屋子、那屋子相近會堂、

北1872：保羅就離開會堂、到了一個人的家裏、那人名叫猶士都、是敬畏神的、他的家靠近會堂、

(2) 1892：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、  
(使徒18:8)

1906：那管會堂的人基士部、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、

1889：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、

浅1885：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、

浅1886：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、

浅1889：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、

浅1890：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、

浅1898：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、

麦1857：管會堂的人革哩士布闔家信主、哥林多的人聽道理、信耶穌受洗禮的狠多、

北1872：管會堂的人革里士布和他的全家、都信了主、還有許多哥林多人聽了道理、信從受洗。

(1) の1892年版の指示詞「那」は1889年版の官話訳と一致していることから、1889年版の官話訳が1892年版に継承されていると言える。また、官話訳では指示詞が使用されているが、すべての浅文理訳では「室近會堂」と訳出され、指示詞は使用されていない。メドハースト・ストロナックの南京官話訳では「那屋子相近會堂」と訳出され、1889年版および1892年版と同じく指示詞「那」が使用されていることから、この「那」はメドハースト・ストロナック訳に由来するものとする。北京委員会の北京官話訳では「他的家靠近會堂」と漢訳され、英語欽定訳の「whose house joined hard to the synagogue」に近いものとなっている。(2) では1889年版と1892年版の官話訳になかった指示詞「那」が1906年版の官話訳では追加されている。浅文理訳ではすべて「宰會堂者革哩士布」と訳出され、指示詞は見られない。また、メドハースト・ストロナックの南京官話訳と北京委員会の北京官話訳でもそれぞれ「管會堂的人革哩士布」、「管會堂的人革里士布」と指示詞なしで訳出していることから、この箇所はグリフィス独自の訳出であると思われる。

### 3.2.4. 名詞の異同

名詞の異同はヨハ5:32、黙示4:3の2節2箇所に見られる。

(1) 1892：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、(ヨハ5:32)

1906：有一爲我作見證的、我曉得他爲我作的見證是真的、

1889：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、

浅1885：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、

浅1886：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、

浅1889：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、

浅1890：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、



浅 1898：有他人爲我作證、我知其爲我所作之證乃眞、

麦 1872：有個替我做見證的人、我曉得他的見證是真的。

北 1872：有別人爲我作見證、我知道他爲我作的見證是真的。

(2) 1892：坐在寶座上的、容貌如同金剛石、紅寶石、圍着寶座有虹、顏色如同綠寶石、(默示 4:3)

1906：坐在寶座上的、容貌如同金剛石、黃寶石、圍着寶座有虹、顏色如同綠寶石、

1889：坐在寶座上的、容貌如同金剛石、紅寶石、圍着寶座有虹、顏色如同綠寶石、

浅 1885：坐之者、貌如金剛石、黃寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1886：坐之者、貌如金剛石、黃寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1889：坐之者、貌如金剛石、紅寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1890：坐之者、貌如金剛石、紅寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1898：坐之者、貌如金剛石、紅寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

麦 1857：那坐着的面貌、好像女碧玉和瑪瑙的顏色、有一條虹、像葱玉似的、圍着那座位、

北 1872：坐在寶座上的、容貌如同金鋼石、黃寶石、圍著寶座有虹、顏色如同綠寶石。

KJV: And he that sat was to look upon like a jasper and a sardine stone; and there was a rainbow round about the throne, in sight like unto an emerald.

TR: καὶ ὁ καθήμενος ἦν ὅμοιος ὁράσει λίθῳ ἰάσπιδι καὶ σαρδίνῳ· καὶ ἶρις κυκλόθεν τοῦ θρόνου ὅμοιος ὁράσει σμαραγδίνῳ.

(1) の異同箇所について、すべての浅文理訳では「有他人爲我作證」と訳され、メドハースト・ストロナックの南京官話訳では「有個替我做見證的人」、北京委員会の北京官話訳では「有別人爲我作見證」と訳出されている。これは北京官話訳の影響というよりも、浅文理訳の「他人」を官話に訳出する際に必然的に「別人」となったと考えた方がよい。つまり、1892年版の官話訳は1889年版の官話訳を継承したもので、1889年版の官話訳は1889年版の浅文理訳に基づいて訳出されたものとする。 (2) の異同箇所は、ギリシア語公認本文では「σαρδίνῳ」(σάρδονの単数・与格)、英語欽定訳では「sardine stone」と色彩名が見られない語であるが、1885年版と1886年版の浅文理訳では1906年版の官話訳と同じく「黄寶石」と訳出され、1889年版と1890年版、1898年版の浅文理訳では1892年版と1889年版の官話訳と同じく「紅寶石」と色彩名が付された訳語となっている。「sardine stone」にあたる漢訳語は、1823年のモリソン訳と1822年のマーシュマン・ラサール訳では「瑪瑙之玉石」、1852年の文理代表訳と1869年のブリッジマン・カルバートソン訳では「瑪瑙」といずれも色彩名は付されていないが、1872年の北京委員会北京官話訳では「黄寶石」、1908年と1919年の官話和合訳では「紅寶石」と色彩名が付された訳語となっている。英華字典における「sardine」の訳語は1822年のモリソン英華字典、1844年のウィリアムスの英華字典、1848年のメドハーストの英華字典には見出し語として見られないが、1869年のロブシャ

イトには「Sardel, Sardine, Sardius」の訳語として「寶石」が見えるが色彩名は付されていない。さらにロプシャイト系統のキングセルの英華字典(1899年)と《華英音韻字典集成》(1903年)でも「Sardel, Sardine, Sardius」の訳語として「寶石」が充てられている。色彩名が付されるのは1910年の《商務書館英華新字典》、1914年の《増廣商務印書館英華新字典》で、「Sard, Sardine, Sardius」の訳語として、それぞれ「深血紅寶石」と「血色紅寶石」が充てられている。また1908年版の序文が付された1921年の顔惠慶らによる《英華大辭典(小字本)》では「Sard, Sardine, Sardius」の訳語として、やはり「紅寶石、櫻紅瑪瑙、血色紅寶石」と色彩名を含んだ訳語となっている。このほか、1916年のヘメリングの英華字典でも「Sardachate」の訳語として「紅瑪瑙」が充てられている。

これらの訳語から「sardine stone」の訳語には赤色が付されているが、グリフィス訳や北京委員会北京官話訳にある「黃寶石」の「黃」はどこに由来するのであろうか。1923年の《英漢雙解韋氏大學字典》の「sardius」には、1つ目に「A sard, 帶褐色之紅玉髓」、2つ目に「(Bib.) A gem in the Hebrew high priest's breastplate, perhaps a ruby, 希伯來高級祭司胸甲中之寶石, 或係紅玉」の記載が見られる。「黃寶石」は恐らく前者に由来するものであるが、この箇所の解釈としては後者が相応しく、「黃寶石」よりも「紅寶石」のほうが訳語として適切であり、1906年版の官話訳で「黃寶石」となった理由は不明である。しかし、少なくともこの異同箇所から、1892年版の官話訳の「紅寶石」が1889年版の官話訳か、直近の1890年版の浅文理訳に依っていると見えそうである。

### 3.2.5. 虚詞の異同

虚詞の異同は使徒9:17の1節2箇所とヨハ5:32の1箇所、計3箇所に見られる。

- (1) 1892: 亞拿尼亞就去、進了那家、用手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、使你能看見、又被聖神充滿、(使徒9:17)
- 1906: 亞拿尼亞就去、進了那家、用手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、使你得看見、又得聖神充滿、
- 1889: 亞拿尼亞就去、進了那家、用手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、使你能看見、又被聖神充滿、
- 浅1885: 亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾者、即主耶穌、遣我來使爾得見、且充滿於聖神、
- 浅1886: 亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾者、即主耶穌、遣我來使爾得見、且充滿於聖神、
- 浅1889: 亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾之主耶穌、遣我使爾得見、又充滿於聖神、

浅 1890：亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾之主耶穌、遣我使爾得見、又充滿於聖神、

浅 1898：亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾之主耶穌、遣我使爾得見、又充滿於聖神、

麦 1857：亞拿尼亞就去、進他的房子、用手摸着他、道、兄弟掃羅呵、你來的時候、在路上所看見的主耶穌、打發我來、使你能殼看見、被聖神感動。

北 1872：亞拿尼亞就去了、進了那家、手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、叫你能看見、又足足的蒙聖靈感動。

(2) 1892：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、(ヨハ5:32)

1906：有一爲我作見證的、我曉得他爲我作的見證是真的、

1889：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、

浅 1885：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、

浅 1886：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、

浅 1889：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、

浅 1890：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、

浅 1898：有他人爲我作證、我知其爲我所作之證乃真、

麦 1872：有個替我做見證的人、我曉得他的見證是真的。

北 1872：有別人爲我作見證、我知道他爲我作的見證是真的。

(1) の異同箇所は、1885年版と1886年版の浅文理訳では「遣我來使爾得見、且充滿於聖神」、1889年版と1890年版、1898年版の浅文理訳でも「且」が「又」に代わっているが、「遣我使爾得見、又充滿於聖神」とほぼ同じ構造の訳出法が採られている。メドハースト・ストロナックの南京官話訳では「使你能殼看見、被聖神感動」と漢訳され、北京委員会の北京官話訳では「叫你能看見、又足足的蒙聖靈感動」と訳出されている。ここから、1892年版の官話訳は1889年版の官話訳を継承していると言えるが、1889年版の浅文理訳以降から「且」が「又」に代わっていることから、1889年版の官話訳のこの箇所が1889年版の浅文理訳に依拠している可能性を指摘できる。(2) では1889年版と1892年版の初版系官話訳になかった説明の語気を示す助詞「的」が1906年版で加えられ、より踏み込んだ漢訳文を実現している。この訳出方法はメドハースト訳や北京官話訳とも異なっており、グリフィス独自の漢訳手法と言える。

### おわりに

これまでの考察から、グリフィスによる官話訳《新約全書》の1892年版と1906年版における異同箇所について、次の3点が明らかとなった。1つ目は、グリフィスによる漢訳新約聖書の節区

分には節の合併箇所が多く見られ、グリフィスの漢訳聖書の特徴が現れていることである。節の合併については、1889年までは安定が見られないが、1890年以降はどの訳本でも一致が見られ、安定していることが明らかとなった。2つ目は、1892年版の官話訳の漢訳文は、1889年版の官話訳と1892年版と出版年が近い1889年版と1890年版の浅文理の影響を受けているということである。3つ目としては、節の合併箇所と訳文の異同箇所の考察から、1892年版と1906年版の官話訳は1種類の版本のみに依拠して完成したものでなく、複数の異なる文体による訳本を参照した複雑なものであることが明らかとなった。これはグリフィスの官話訳が浅文理訳から重訳されたことと、グリフィスの浅文理訳自体も修訂が施されてきたことによるものと考えられる。つまり、1892年版の官話訳は初版の1889年版の官話訳の訳文を継承しつつも、初版から修訂が加わっている1889年版と1890年版の浅文理訳も参照しつつ成立したものであり、1906年版の官話訳は節区分を1898年版の浅文理訳に依拠しつつ、初版系の1892年版の引照なしの官話訳の訳文をもとに、メドハースト・ストロナックの南京官話訳や北京委員会の北京官話訳の採用とグリフィスによる新たな独自の修訂が加わって完成したものである。グリフィスの官話訳の訳文は全体として初版系と最終訳系との間に大きな異同は見られないが、本論で考察した異同箇所もあることを念頭に置きながら、今後はグリフィスの官話訳における文体を構成する官話の特徴を明らかにしていきたい。

最後に、本稿は2022年度からの日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「メドハーストによる南京官話訳新約聖書における語彙と文法に関する総合的研究」(課題番号22K00551)の成果の一部であることと、論者が関西大学アジア・オープン・リサーチセンター研究員および愛知大学国際問題研究所客員研究員であることも付言しておく。

## 注

- 1) Spillett 1975の119-121頁を参照。
- 2) グリフィスについての詳細は永井2016の2-3頁を参照。
- 3) 1889年の初版の官話訳では、Ⅱコリ3:7-8、コロ3:9-10の2箇所は合併されていないが、意味上から合併しても良い箇所である。
- 4) メドハースト・ストロナックの南京官話訳と北京委員会による北京官話訳で、この箇所のアーメンが訳出されていない理由は未詳。1852年の文理代表訳でもアーメンの訳出は見られない。
- 5) メドハースト・ストロナックの南京官話訳と北京委員会の北京官話訳のギリシヤ語の表記は「腓立比」で、この箇所と統一して訳出されている。

## 参考文献

[聖書]

Robert Morrison 1823. 《神天聖書》。(モリソン訳)

Joshua Marshman, Joannes Lassar 1822. 《聖經》。(マーシュマン・ラザール訳)

1852. 《新約全書》。上海：墨海書館。(文理代表訳)

1857. 《新約全書》。上海：墨海書館。(メドハースト・ストロナック南京官話訳)
1869. 《新約全書》。上海：美華書館。(ブリッジマン・カルバートソン訳)
1870. *The Holy Bible, containing the Old and New Testaments*. The British and Foreign Bible Society. London. (英語欽定訳)
1872. 《新約全書》。上海：美華書館。(北京委員会北京官話訳)
- 楊格非 1885. 《新約全書》。(浅文理訳)
- 楊格非 1886. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- 楊格非 1889. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- 楊格非 1889. 《新約全書》。(National Bible Society's Press, Hankow)。(官話訳：引照なし、ロマ7:7-9:8とロマ12:15-16:20は未見)
- 楊格非 1890. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- 楊格非 1892. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(官話訳：引照なし)
- 楊格非 1898. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- Westcott & Hort 1901. *The New Testament in the Original Greek*. Macmillan and Co., Limited. London. (ウエストコット・ホートギリシア語本文)
- 楊格非 1906. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(官話訳：引照あり)
1908. 《新約全書》。上海：聖書公會。(官話和合訳)
1919. 《舊新約全書》。上海：大英聖書公會。(官話和合訳)
- H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ* (The New Testament, The Greek Text Underlying The English Authorized Version of 1611). The Trinitarian Bible Society. (ギリシア語公認本文)
- [その他]
- Robert Morrison 1822. *A dictionary of the Chinese Language, in three parts. Part the first, containing Chinese and English arranged according to the keys; Part the second, Chinese and English arranged alphabetically, and Part the third, consisting of English and Chinese. Part III*. The Honorable East India Company's Press. Macao.
- S. Wells Williams 1844. *An English and Chinese Vocabulary, in the court dialect*. The Office of the Chinese Repository. Macao.
- W. H. Medhurst 1848. *English and Chinese Dictionary. In two volumes. Vol II*. The Mission Press. Shanghai.
- Lobscheid 1869. 《英華字典》, *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation. Part IV*. "Daily Press" Office. HongKong.
- F. Kingsell 1899. *A Dictionary of the English and Chinese Language with the Marchant and Mandarin Pronunciation*. Kingsell&Co.. Yokohama.
1903. 《商務書館英華音韻字典集成》。上海：商務書館。
- R. Wardlaw Thompson 1908. *Griffith John The Story of fifty years in China*. The Religious Tract Society. London.
1910. 《商務書館英華新字典》。上海：商務書館。
1914. 《增廣商務印書館英華新字典》。上海：商務印書館。
- K. Hemeling 1916. *English-Chinese Dictionary of the standard Chinese spoken language (官話) and handbook for translators*. Statistical Department of the Inspectorate General of Customs. Shanghai.
- 顏惠慶他 1921. 《英華大辭典 (小字本)》。上海：商務印書館。
- 郭秉文・張世鑿 1923. 《英漢雙解韋氏大學字典》。上海：商務印書館。
- 密立根・賈立言・馮雪冰 1934. 《新約聖經流傳史 附漢文聖經譯本小史》。上海：広學會。

Hubert W. Spillett 1975. *A Catalogue of Scriptures in the Languages of China and Republic of China*. British and Foreign Bible Society. London.

永井崇弘 2016. 『グリフィス訳浅文理新約聖書の版本とその訳文について－『馬可福音』からの考察－』, 『福井大学教育地域科学部紀要』第6号：1-13頁。